

先日、千葉県鴨川市の大山千枚田という棚田百選にも選ばれている場所で行われた蔵開きで、できたての新酒を手にすることができた。この新酒は、棚田で栽培された酒造好適米である縹の舞を用いて、二つの蔵元が醸造した日本酒なのだが、その受け渡しが行われたのである。私自身の前任校が千葉大学であったことや、千葉県に残された古文書を題材に近世史の研究を行っている関係もあって、千葉県の現在に関心を持つうち、棚田景観を存続させるために、地元のNPO法人が、棚田のオーナー制度やトラスト制度を立ち上げていることを知り、その中に、酒造米を棚田で育てて最後は日本酒の形で分けてもらうトラスト制度があるのを知った。そしてこれに参加するようになって10年ほどが過ぎた。この制度では、4月の田植え、6月の草刈り、8月の稲刈り、そして2月の蔵開きに参加することができ、その他の稲の管理は地元の方が担ってくださる。全カリの事務の方を稲刈りにお連れしたこともあるが、トラスト制度の株を誰かが持っていれば、それに付随して誰でも参加が可能である。今年それに参加しながら、こうした稲作体験を組み入れた体験型の授業をいつか組み立てられないかと少しだけ感じた。単なる思いつきに過ぎず具体性はまったく伴わないが、体験して初めてわかる稲作のイロハ、伝統を知り、そして農業の現状、NPO法人運営の実情などを考えてもらえる授業を、(自身が属する史学科の科目には当てはまらないだろうから)全学共通科目にできないだろうかなどという想いも芽生えつつある。開講学期や時期を考えると、実現は難しそうだが。

このような個人的体験や感慨を書き連ねては、本号の「あとがき」たりえないので、以下改めて。巻頭言で中島先生が触れておられるように、2016年度は「学びの精神」科目が導入された初年度にあたり、学士課程統合カリキュラムのスタートという一つの節目を迎えた。全学共通カリキュラムが導入されてちょうど20年目に始まったこのシステムが今後どのようになってゆくのかかわからないが、少なくとも2017年度は、「学びの精神」科目導入の成果が検証され始める年になろう。こうした節目に立ち会い、さらにあと一年、全カリアグリーチームメンバーとしての任期が延長されたので、よりよい形の実現に向けて、これを見つめてゆくことにしたい。

ごとう まさとし